

「アドルノにおける交換の批判と、交換されえないもののあり方について」

志田 圭将（本学言語社会研究科修士課程）

交換されえないものはあるはずだという確信と、交換されえないものなどないのではないかという疑念が、アドルノの思想においてどのような仕方で両立しているのか。そして、交換されえないものがあるとしたら、それはどのような仕方でありうるのか。このことを明らかにするのが本報告の目的である。

アドルノは、等価交換の批判というかたちで、同一化の働きを批判する。アドルノが批判する同一化の働きとは、ある対象を概念へと包摂すること、そのことを通じて別の対象と等置することである。同一化の働きに対するアドルノの徹底的な批判（Kritik）は、交換されえないもの・かけがえのないものがこの世にはあるのだというアドルノの信念を示している。同時に、交換されえないものなどないのではないかという疑念こそが、同一化の働きに対する原理的な検討（Kritik）をアドルノに課している。

アドルノによれば、等価交換は人を個体化・主体化し、人間の認識を条件づける。等価交換によって規定された社会では、本質的に、人は交換者として、物は交換対象として現れる。このとき、人は抽象的で自律的な交換主体であり、物は交換対象として質を失った状態にある。それが誰であるか、それが何であるかはどうでもよい *gleichgültig*。あらゆるものに等しく *gleich* 妥当する *gültig* 交換原理が、社会のあり方を形作る。

等価交換によって規定された社会は、無関心 *gleichgültig* な社会である。これに対して、関心をもつという態度、何かに対して情熱的に関わるという態度は、いわば物の質を蘇らせる。例えば、「ほかでもないあなた」に向けられる愛という情緒的關係は、質的なものへの固執だ。愛の中で、人は、他者の存在に動かされ、不安定にさせられることを通じて、その自律的な主体としてのあり方が崩壊させられることを経験する。いわば、ここでは自他が相互浸透している。そもそも人は他者との交わりの中で生きているのだとすれば、愛においてみられるものこそが、具体的な人間の姿である。しかし、交換が社会の基調をなしているならば、具体的な姿の人間は黙殺された状態にある。ここでは、あらゆるものにおいて、抽象的で他のものと通約可能な個という課せられた「本質」が「実存」に先立つ。アドルノが「全面的な交換社会」という表現で意図しているのは、こうした事態である。

そうであるなら、個々の存在は、文字通りの意味では、確かに独自のものとして存在している。問題は、個々の存在が、交換社会の中で、交換社会に抗して、その独自性をどのように主張しうるのかということである。これをとりわけ強く主張しているものが、アドルノにとっては、芸術である。本報告では、交換と愛をめぐる議論を踏まえて、アドルノの文化論・芸術論に着目して検討を行う。